



トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

〒163-0437 東京都新宿区西新宿2-1-1

新宿三井ビル37F

Phone: 03-3344-1701 (代)

Fax: 03-3342-6911

URL <http://www.toyotafound.or.jp>

No.88

Jul. 1999

モンゴルの日本文学翻訳

— 司馬遼太郎・開高健をはじめとして —

亜細亜大学教授 鯉淵 信一

モンゴルは首都ウランバートルを一步離れると、今でも草原と遊牧の国だ。行けども行けども草の海が連なる。人家を見ることも、人に出会うこともめったにない。そんな風景の中で遊牧民に出会ったりすると、ほっと心が安らぐ。

遠くに羊の群れが見え、近づくと、羊飼いの少年が笑顔で迎えてくれる。少年は一冊の本を、大切に抱えている。本は何人もの手を経たのか、表紙が黒光りしている。

その本が日本の小説だったり、童話だったりしたら、そして少年が草原で羊を追いながら夢見る世界が、日本だったりしたらどんなに愉快だろう。

モンゴル語に翻訳された日本の文学作品は、私の知るところでは20作品余りある。モンゴルが人口250万人に満たない小さな国で、しかも70年間、社会主義体制下にあったことを考えると、決して少ない数ではない。他のアジア諸国と比較してみても遜色ない数と言えるのではないだろうか。

この20作品の刊行年代や翻訳作品をながめるだけで、モンゴルの歩んできた歴史やモンゴル人の関心の有り様などが窺い知れて面白い。刊行年代をみると、1950年代から80年代までの40年間で翻訳されたのはわずか7作品、他はすべて1990年の民主化運動以後に集中している。しかも80年代までは、すべてがロシア語版からの間接的な翻訳で、日本語原本からの直接の翻訳本が出るのは90年代以後に限られている。

モンゴルは1921年にソ連の支援で社会主義革命を果たした後、強いソ連の影響下に国造りを進めてきた。文学の面でも、ソ連型の「文学は社会主義建設に奉仕するもの」という基本方針が貫かれた。文学は党のイデオロギー統制下に組み込まれてしまい、許される創

作方法は、所謂「社会主義リアリズム」の道だけだった。日本や欧米の文学作品が、正当に評価される余地はほとんどなかったのである。

それが民主化以前の訳本の少なさや、ロシア語版からの翻訳のみという特徴に現れている。「ロシア語版からの翻訳」というのは、すでに社会主義の元締め・ソ連で翻訳許可済みということであり、言い換えればロシア語版を利用すれば、政治的批判にさらされることもなく、また出版許可も出やすかったというわけだ。翻訳であれ、本の出版には当局の許可が必要だったのである。

モンゴルでの最初の日本文学作品の出版は、徳永直らのプロレタリア文学の短編を集めた『赤旗の下で』(1956年)であった。そして1960年に夏目漱石の『坊ちゃん』が出版された。しかしその後1974年までの15年近く、出版された作品はなかった。

ただ60年代初めから、モスクワに文学留学した詩人ヤボーホランが俳句に接し、その深さ、面白さなどをエッセイなどで盛んに

『最後の将軍』出版祝賀会 (ウランバートル)

右: トムルバートル氏 左: ツェベクマさん (『草原の記』の主人公)
(後ろに並んでいるのはモンゴル語版『最後の将軍』)



紹介し、自らも「俳句形式の短詩」を発表したりしていた。これがひそかに、しかし深く若い詩人たちに影響を与え、俳句や短歌、現代詩などを集めた『日本の詩』（1974年）の翻訳・出版へとつながっていった。

しかし、俳句など日本の詩への関心の高まりは、「モンゴル詩の伝統的發展を阻害する」として批判され、それ以上広がることはなかった。70年代にはこの他に、松谷みよ子の『龍の子太郎』（1976年）が出版されただけだった。80年代には大江健三郎の『遅れてきた青年』（1981年）、太宰治、大江健三郎ら18人の作家の短編を集めた『近代日本文学選集』（1985年）、小林多喜二の『工場細胞・安子』（1987年）の3作品が出版された。

90年代に入って民主化運動が広がり、社会主義の呪縛から解放されると、一気に日本文学が翻訳されはじめた。代表的なものには、夏目漱石『三四郎』（1990年）、川端康成『伊豆の踊り子』（1991年）、石川啄木『啄木詩集』（1995年）、司馬遼太郎『最後の将軍』（1996年）、司馬遼太郎『草原の記』（1997年）、三浦綾子『道ありき』（1997年）、開高健『裸の王様・パニック』（1999年）などがある。またこの他、司馬遼太郎の「二十一世紀に生きる君たちへ」や「洪庵のたいまつ」、「天山の麓の緑の中で」、「文明の東漸」といったエッセイ風の作品が新聞紙上に次々と紹介された。民主化以後、このように日本文学が盛んに翻訳・出版されようになった背景には、官民あげての交流の拡大があり、何よりもその土台にモンゴル人の親日観があるようだ。

モンゴルは出版文化が育ちにくい環境にあると言ってもいい。とりわけ250万人という人口の少なさは致命的だ。国土は日

本の5倍近くもあるが、人口密度は首都人口70万人を除くと、10km²当たり1人という気の遠くなるような広さである。この国土の広さは羨ましいかぎりだが、一方で流通や通信といったことを考えると呆然としてしまう。

しかしこうした悪条件の中でも、90年代以降、モンゴルで日本文学の翻訳や出版事業に情熱的に取り組んでいる人物がいる。モンゴル日本文化・文学センター代表のD. トムルバートル氏である。

彼は1976年から5年間、モスクワ大学に留学し、さらにモンゴル国立大学、東京外国語大学などで日本語や日本文学を学び、1997年に自ら上記センターを設立して、日本の文学や文化の紹介に力を尽くしている。

彼はモスクワ大学留学中に、『平家物語』のロシア語訳で著名なイリーナ・L・リヴォーバ女史や芥川龍之介や太宰治、安部公房らの作品のロシア語訳で知られるウラジミール・S・グリブリニン氏などから直接、日本文学の講義を受けて感銘し、いつかは自分も日本文学をモンゴルにも紹介したいと考えたと言う。

当時はモンゴルではもちろんのこと、ソ連でも日本映画が上映されることもなく、日本紹介の本もなく、写真すら見ることができず、作品に描かれる日本の風景など想像することさえできなかった。そ

『草原の記』の完成を祝って（ウランバートル）右から編集責任者トムルバートル氏、訳者ジャルガルサイハンさん、司馬遼太郎夫人みどりさん、主人公ツェベクマさん



んな中でロシア語を通して接した日本文学だったが、その豊かな作品世界に魅了され、日本への憧れをつのらせたと言う。「リヴォーバ先生の素晴らしい講義を、今でもときどき思い出します」

彼のこの言葉を、私は1985年に交換教授として教鞭をとっていたモンゴル国立大学の教室で聞いた。日本のことなど何も知らなかったモンゴルの一学生が、ロシア人教師の『平家物語』や『走れメロス』などの講義を聞いて感動し、日本文学を夢みた——彼の言葉はそれからずっと、私の脳裏に残った。

その彼が91年以降、『伊豆の踊り子』、『最後の将軍』、『有馬嵩詩集』などを次々と翻訳し、『最後の将軍』では、「1997年度モンゴル翻訳同盟賞」を受賞したのである。さらに自ら翻訳するだけでなく、編集や出版の手助けの役も荷おうと夢を膨らませ、日本文化・文学センターを設立した。しかしモンゴルの現状は、自力で出版ができる状況にはない。

ようやくトヨタ財団の「隣人をよく知ろう」の出版助成を受けることで、また一つ彼の夢が形となった。『草原の記』、『裸の王様・パニック』がそれである。

羊の群れのそばで、羊飼いの少年が夢中で本を読んでいる姿は、よく目にする草原の風景だ。日本の本を抱えて羊を追う少年と草原で出会う日は、きっとある。

フォード財団研究の過程で感じたこと

プログラム・オフィサー 牧田 東一

筆者は、1997年から1999年の2年間の間に、財団の許可を得て、東京大学総合文化研究科においてフォード財団の研究を行い、同科から修士号を得た。この研究では、1950年代から1960年代前半のフォード財団のアジアを対象とした国際的な活動について調査したが、研究内容の紹介は別の機会にゆずり、本稿ではこの研究の過程で見聞きした財団研究にまつわるこぼれ話を紹介したい。

●米国の民間財団研究

先行研究を調べていくうちに、米国における民間財団研究には大きく言って2つの流れがあることに気づいた。第一は、米国の中心的なイデオロギーである多元主義(pluralism)を基礎とするthird sector論に則った財団研究である。財団は、非国家的、非市場的存在として位置づけられ、社会的実験の空間であるthird sectorに属するとする。この議論は今日では、非営利セクター(NPOセクター)論に展開していることは言うまでもない。

第二は、この多元主義への批判を根底に持つ理論の流れで、エリート論とネオ・マルクス主義の二つに分かれる。前者は、米国社会の様々なセクターが公共的決定に与える影響力は同じではないとし、エリートの公共政策決定への過大な影響力を批判する考え方である。エリートに支配される民間財団はエリートの公共政策決定過程への影響力行使の手段として、批判の対象となる。そこでは、民間財団は米国の民主主義におけるディレンマ(大衆参加とリーダーシップの間の葛藤)の一部として認識されている。ネオ・マルク

ス主義者(ニューレフトと呼ばれる)は、民間財団が支配層による文化的ヘゲモニー生成の装置であると認識し、一見革新的に見える財団活動が、実は支配層の利益を保持するための見せかけだけの改革の手段であると批判している。

学術的な財団研究はどれも後者の批判的立場のものが多く、財団に奉職していると、学界では財団批判論が主流であることはなかなか認識しにくい。また、財団の存在理由の説明は米国社会のあり方の中に求められるという、単純ではあるが本質的な問題も重要である。米国の財団研究はアメリカ研究にならざるを得ないのである。

●アーカイブス

研究のために、フォード財団の文書館(アーカイブス)に合計で30日程度通うこととなった。ニューヨークの国連ビルの近くに窓と緑の多いフォード財団ビルがある。その地下1階にアーカイブスが置かれている。アーキビストが4人勤めていて、彼らの中でも人種と性別のバランスが保たれているのはいかにもフォード財団らしい。多くの資料はマイクロ化されており、プロジェクトファイル、理事会ファイル、理事長ファイル、演説、調査報告、オーラルヒストリー、職員の経歴などに分類されており、研究目的であれば一般に公開されている。しかし、あまりにも資料が多いので、事前にどのプロジェクトの何を調べるといことを決めていかないと、サービスは受けられない。電話やemailでの問い合わせにも答えてくれる。資料を見せてもらう前には、アーキビストが一応公開可能かどうかをチェックするが、公開期限のきて

いる文書についてはほとんど規制がないように感じた。プロジェクトファイルには、申請書、やりとりされた手紙、報告書などがマイクロフィルムになって保存されている。まず年次報告書で調べたいプロジェクトを探して、アーキビストに依頼する。上記のチェックに若干時間をとるので、事前に連絡しておく必要がある。

巨大なフォード財団であるから、それが生み出す文書の量は膨大なものがあると思われる。基本的な資料保存の方法は、クローズされたファイルをほとんどそのまま業者に委託してマイクロ化してしまい、期限が来ると公開し、研究者から要請のあった分だけアーキビストがチェックするというもので、大ざっぱではあるが合理的な方法がとられていると感じた。

2度にわたる合計30日間ほどのアーカイブス調査で他の研究者と出会うことはまれであった。時々やってきたのは財団スタッフで、過去の助成ファイルを見にきていた。その他には、労働運動を調べていたジャーナリスト、また財団のことを書こうとしている元副理事長くらいであった。筆者が見た1950年代のプロジェクトファイルはほとんど未利用であった。

●財団の歴史を書く

財団の歴史に興味を持つ研究者はアメリカでもあまり多くない。そうした比較的数の少ない財団研究の中でロックフェラー財団に関するものが大半を占めている。フォード財団はロックフェラーに比べると半分程度の歴史しかないためかも知れないが、研究は非常に少ない。全体を扱った本は2冊しか書かれていないし、どちらも20年以上前に書かれたものである。

異動の激しい財団スタッフの多くはフォード財団のほんの10年程前の活動についてすらほとんど知らない。フォード

財団の最初の理事長が誰であったかさえ、小生の話したスタッフの誰も知らなかった。その意味では、設立以来50年たったフォード財団の「組織の記憶」はアーカイブスの中にしか存在しないのである。そして、その記憶のほとんどは未だ眠っている。おそらく21世紀に入るとフォード財団も本格的に歴史研究の対象になってくるであろう。その時になって初めて、この巨大な資料の山を保存し、整理し続けてきた

ことの意味が出てくる。つまり、アーカイブスはフォード財団の数あるプロジェクトの中でも最も遠い未来に向けての超長期投資なのである。しかし、その投資が確実なものであろうことは、ロックフェラー財団という先輩財団の例が示している。ソフト・パワー論が言われるが、こうした超長期投資を着実に進めることが、未来の「ソフト・パワー」への確実な投資であることを理解しているのだろう。

昨年度より6件増であった。昨年度26件に急増したアフリカ州は一昨年並の9件にもどり、ヨーロッパ州が13件から20件に増えた。英語による申請は15%で、昨年度より2ポイント増えている。

申請者の平均年齢は、個人研究32.3歳、共同研究47.8歳で、例年並であった。

種別	申請数		増減
	1998年度	1999年度	
研究助成A	490	473	-17
研究助成B1	185	187	2
研究助成B2	113	120	7
研究助成B3	178	160	-18
合計	966	940	-26

注 A: 4課題共通
 B1: 課題1 多様な文化の相互理解と共存
 B2: 課題2 新しい社会システムの提案
 B3: 課題3 これからの地球環境と人間生存の可能性
 課題4 市民社会の時代の科学・技術

研究助成1999年度の申請結果

シニア・プログラム・オフィサー 久須美雅昭

本年度研究助成の公募は4月1日から5月20日までと、従来より締切を10日繰り上げた。98年秋からのWEBサイト公開に伴い応募数が急増することが予想されたため、受付から選考までの作業日程を確保するのがねらいであった。

●WEBサイトの効果と申請件数

公募期間にはWEBの役割が顕著であった。4月に入ってアクセスが急増し、4月の訪問者数は4,629、5月が4,568で3月以前に比べ倍以上になっている。このうち、申請書のダウンロードを行ったと思われる件数が日本語用紙で合計4,159件、英語用紙で973件に及ぶ。昨年度、封書により用紙を請求してきたのが日本語約3千件、英語約4百件だから、これを上回っている。封書による用紙の請求は今年はほぼ半減したが、これはWEBに吸収されたと思われる。

ところが、申請書の取り寄せはこれほど増えながら、本年度申請総数は940件で、昨年度より26件の減に落ち着いた。なんとも不思議なことである。各種別ごとの申請件数を表に示す。種別・課題間の分布は

ほぼ昨年同様といえよう。

申請総数940件中、ダウンロードした用紙による申請は323件(34%)であった。また、財団についてどの経路で知ったかというアンケートで、WEB経由で知ったというものが回答数の12%であった。これは記事・広告等のメディア経由の9%を上回っている。このあたりにもインターネットWEBの効果の大きさがうかがえる。ちなみに、どの経路からのうち、「人から聞いて」が54%で、「ポスターから」が29%であった。口コミがもっとも強力なメディアであることは従来と変わらない。大学の掲示板のポスターもまだまだ無視できないという結果であった。

●申請者の属性など

申請(代表)者の男女別では、数年来の傾向として女性の占める比率がさらに伸びた。個人研究で40%と昨年度より3ポイント、共同研究で17%と昨年度より2ポイントそれぞれ増えている。

国籍別では、全申請者のうち外国人の占める割合が23%で、この数字は97年度以来3年間でまったく同じであった。国別の順位は中国57件、韓国39件、アメリカ17件で6年連続不動の順位である。地域別で日本以外のアジア州147件というのは、

トヨタ財団アーカイブを巡って

財団ではWEBによる情報公開をすすめるのと平行して、これまでに蓄積された助成成果の書籍・報告書や、財団の記録文書などをどのように整理するか、また、将来的にどう公開していくかについて検討を行っている。その一環として6月7日にアーカイブの専門家である小川千代子氏を講師に招き、現状の評価と今後に向けての提言をうかがった。

小川氏の話しでは、「最近では各方面で近い過去を考現学的に検証する傾向が強まっており、アーカイブス(文書館)や博物館の資料がこれまでにない強い関心と呼んでいる」とのこと。「トヨタ財団もこれまで日本の学術振興に少なからぬ役割をこなしてきたことからすれば、そのアーカイブス公開に対する社会的なニーズは大きいと考えるべき」という。とくに、「これまでの助成実績に加え、その証である記録を提供していくことは助成とならぶもうひとつの社会貢献のあり方」という指摘は、財団アーカイブスの位置づけとしてきわめて重要なことと受け止めた。(M.K.)

インドシナの人文学を支える人々

プログラム・オフィサー 本多 史朗

定例の東南アジア出張で、3月1日から31日まで、タイ（バンコク、チェンマイ、チェンライ、パタニ）、ラオス（ヴィエンチャン）、カンボジア（プノンペン）、台湾（台北）を回ってきた。その折に気がついた点のいくつかを以下に記したい。

●政変劇とクメール古典演劇研究

バンコクを経て、3月4日にカンボジアの首都プノンペンに入ると、1997年夏に始まったフンセン派とラナリット派の衝突とそれに伴う混乱が、昨年夏の総選挙を経てようやく落ち着きを見せていた。昨年11月にプノンペンを訪れた際には、まだ総選挙前後の緊迫した空気のなごりが感じられたが、対立する両派の調停のためにシハヌーク国王も帰国していた一、今回はそれも薄れていた。

プノンペンの目抜き通りにある芸術文化省の建物に顔を出すと、以前同省で技術局長を務めていたクラヴェル氏の姿が見える。ほぼ2年ぶりの再会である。同氏は、クメールの古典文化に造詣が深く、財団の助成を受けて、仮面劇を始めとするクメール古典劇の記録作業に取り組んでいた。しかし1997年夏から始まった混乱を厭い、この時期、政府幹部も何人が殺害された一、家族とともにタイを経て、アメリカにわたり、難を逃れていた。この間、一時、クラヴェル氏の話は不明となり、当方もやきもきしたことがある。滞米中であることが、昨年秋ようやくわかったときはほっとしたものであり、それだけに今回の再会には別種の趣があった。

クラヴェル氏は、ポルポト政権下(1975

～1979年)でも農村で強制労働に従事したことがあり、辛酸をなめたこともある。だが、直接お目にかかっているととてもそのような浮き沈みの激しい歴史の中に身を置いたとは思われない、泰然自若とした雰囲気感が伝わってくる。国外に出ていた際に一時筆を折っていた、クメール古典演劇の記録の執筆にもクラヴェル氏は再度取り掛かり、順調に行けば、財団の出版助成を受け、1～2年のうちに出版にいたると思う。過去四半世紀の間、カンボジアの政治の波に翻弄されてきた同氏の研究の成果が一日も早く世に出ればと思う。

●ラオスの開放政策と次の世代の研究者

プノンペンから、3月8日にラオスの首都ヴィエンチャンに向かうと、中国雲南省政府の援助で昨年からの建設が始まったラオス国民文化ホールが市内のサムセンタイ路に早くもその偉容をあらわし始めていた。おそらく、完成時には、ヴィエンチャンの景観を一新させるような建物となり、演奏会、舞踏、展覧会といった催し物の会場として、ラオス文化事業の拠点になるのではないか。その一方で、同国の代表的な博物館であるラオス革命博物館の国立博物館への改組も進んでいる。これも完成の暁には、一層充実した資料により、同国の歴史が展示されることになると思われる。

このような新しい展開を見せているラオスの文化振興事業に責任を持つポジションに、二人の歴史(考古)学者が関わっている。いずれも、四十代半ばの中堅どころで、同国の開放政策が進んだ1990年代前半から豪州の大学に留学し、学位を取ってきた

ばかりである。一人は、情報文化省考古学・博物館局長のトンサ氏、もう一人は、情報文化省の「ラオス史特別プロジェクト」の主査であるスネート氏である。トンサ氏は、1980年代半ばから情報文化省で博物館事業に携わると共に財団の助成を受けて、ラオスの古代碑文の研究をおこなっていたところを豪州に渡り、考古学の学位を取得した(古代碑文研究の成果も一兩年のうちには出版される筈である)。スネート氏も、留学前にはラオス社会科学の歴史部門の主査を勤めていたが、留学後には大著の「ラオスの歴史」の編集作業に取り組みながら、やはり財団の助成を受けて、東南アジア史の教科書のラオス語への翻訳事業に携わっている。ラオスに初めての大学が設立されたのはつい最近の1996年であり、同国は高等教育を受けた研究者の層が薄い。かつてはフランスに留学をするというルートもあったが、1975年の社会主義化以後にはこの道も閉ざされてしまった。この中で、豪州で学び、海外の研究水準や動向も視野に収めたトンサ・スネート両氏の表舞台への登場―正確には再登場というべきだが―は、ラオスの文化事業や歴史研究のこれからに期待を抱かせる。

●北タイの地方出版社と編集者

ヴィエンチャンから、南タイの古都パタニなどを経て、3月22日に北タイの要衝チェンマイにたどり着く。チェンマイは、チェンマイ大学、チェンマイ教育大学、パヤップ大学などを擁する北タイの学術研究の中心地でもあり、その知的活動を支える重要なインフラストラクチャーの一つが、シードンチャイ路にあるシルクウォーム書房である。これもチェンマイでは有名なスリウォン書店の一角に

事務所を構え、1991年の設立以来、質の高い歴史書、辞書、社会科学書の編集出版に携わっている。昨年には「銃器、娼婦、賭博、麻薬：タイの非合法経済と公共政策」(バスク・ボンパイット他著)と題するタイの地下経済に関する本を出版して、学界で大きな反響を呼んだ。

同社の社長兼編集者のトラスヴィン氏とは、1984年に助成を始めて以来編纂に足掛け12年かかった「北タイ古語辞典」(アルンラット・ウィチエンケーオ著)の出版(1997年)以来の付き合いである。多くの場合、タイの出版社は印刷所との区別があまりはっきりしない。日本の出版

社のように、学界の動向にアンテナを張り巡らし、企画を立て、研究者との人脈を耕し、原稿の校正にも自らあたるというタイプの編集者はあまり見かけない。その中でトラスヴィン氏は実に傑出した存在といえる。当方もトラスヴィン氏と話していると北タイの人文科学の動きについて教えてもらうことが実に多い。このような編集者が現われ、北タイの学界で確固とした地歩を築き上げているを見ると、チェンマイの学問の世界のもつ底力を肌で感じる。トラスヴィン氏は現在もいろいろな企画を練っているようで、次回またその話しを聞くのが楽しみである。

●「清代台湾の平埔族についての行政文書の復刻・出版」

1998年度に計画助成を利用して助成した「清代台湾の平埔族についての行政文書の復刻・出版」だが、いよいよその成果の出版(全3巻)が近づいてきた。実際の編集作業に携わっている国立台湾大学文学院人類学系主任(学科長)の謝繼昌博士からの最近の来信によれば、タオカス族に関する第1巻は、7月末に発行されるとのこと。ケタガラン族についての第2巻、クヴァラン、シラヤ、バプザ各族に関する第3巻も追って出版される予定である。台北で台湾史、台湾文化について屈指のコレクションを持つ南天書局などでも販売される見込み。近年台湾では、タブーとされてきた台湾史に対する関心が高まり、研究も盛んになってきたが、その際に重要な一次資料となるのが、日本植民地期に台湾総督府・旧台北帝国大学が収集した非漢族の少数民族についての記録・文書だという。旧台北帝国大学が収集し、国立台湾大学文学院人類学系に收藏されていた平埔族に関する貴重な資料の公開が、台湾研究の一層の促進につながる事が望まれる。なお、このプロジェクトに対しては、在台北の蔣経国国際学術交流基金もトヨタ財団と共に共同助成をおこなっている。本件についての詳細な情報の問い合わせ先は以下の通り。

中華民國台灣台北市羅斯福路四段一號
國立台灣大學文學院人類學系

Huang Yu Ting (助手)
Tel:+886-2-2363-0231
Fax:+886-2-2363-1658

助成プロジェクト短信

●「第7回タイ研究国際会議」

7月4日から8日にかけてアムステルダム大学に於いて第7回タイ研究国際会議が開催された(主催者は、国際アジア研究所ならびにアムステルダム大学政治・社会科学部)。

1990年代に入ってからタイ社会が経験した高度経済成長、民主化の進展、一昨年来の経済危機といった一連の動きを反映して、この会議のテーマは「タイは市民社会か？」(Thai: A Civil Society?)であり、「タイと東南アジアにおける共同体の権利」、「仏教、カルト、そしてポピュラー文化」、そして「エスニック・アイデンティティと国民国家」などの20の各部会に別れて議論がおこなわれた。

基調講演は、「国家を文明化する：タイにおける国家、市民社会、政治」(Dr. Pasuk Phongpaichit)、「公の記憶の中でのタイ民主主義：記念碑とその語るもの」(Dr. Thongchai Winichakul)、「バラバラになった仏教とタイの政治文化：1976年10月6日事件の勃発に際して」(Prof. Charles F.

Keyes)の3本であり、いずれも現在タイ社会で進行中の民主化の問題を、同国の近現代史を溯りながら論じている。

トヨタ財団は、これまでも第2回(1984年、バンコク)、第4回(1990年、昆明)、第6回(1996年、チェンマイ)の各タイ研究国際会議を支援してきたが、今回も経済危機による同国高等教育機関の苦しい財政状況に鑑み、「国家にあがらう人の結び付き：タイ農村再訪」、「新旧が相争う空間としてのタイ文化」、「エスニック・アイデンティティと国民国家」の各部会に参加する若手タイ人研究者、そして「タイとラオスの過去」部会に出席するラオス人研究者の参加費を助成した。

同会議の詳細な情報に関する問い合わせ先は以下の通り。

Conference Secretariat
(International Conference of Thai Studies)
Oudezijds Achterburgwal 185
1012 DK Amsterdam
The Netherlands
Tel:+31-20-525-2940
Fax:+31-20-525-3010
E-mail: thaistud@pscw.uva.nl

新刊紹介

「インド民主政治の転換

—一党優位体制の崩壊—

ラジニ・コタリ著

広瀬 崇子訳

勁草書房刊

99年4.20 B5判 260頁 ¥2,700

ISBN4-326-35117-9

著者のラジニ・コタリ氏は、1928年にインド・グジュラーティ州に生まれ、後にロンドン大学(London School of Economics)で学んだ、インドを代表する政治学者である。南アジアの大国であるインド独自の民主主義のあり方を学問的に追求するとともに、知識人として人権団体などの市民運動にも携わってきており、1975年に時のインディラ・ガンディー政権が非常事態宣言を発動したときには激しい政府批判をおこない、一時国外脱出を余儀なくされたという経歴も持つ。

本書では、インドにおける政党制、連邦制、地方自治などの諸問題を論じており、欧米の政治学のモデルとは異なった、インドの民主主義の本質を析出しようと試みている。コタリ氏の論文はその国際的な評価の反面、同時に難解という点でも定評があり、訳者の広瀬崇子氏は、自らインドに赴きコタリ氏から直接に原文の意味を確認するという苦勞を重ねながら、明晰な訳文を作り上げた。「隣人をよく知ろう」プログラムの助成を受けての出版である。(S. H.)



「ぼくの庭にマンゴーは実るか」

マンヌー・バンダーリー著

橋本泰元監訳

きぬのみちえ訳

段々社刊

99年5.1 B5判 328頁 ¥2,100

ISBN4-7952-6516-X

本書は、「隣人をよく知ろう」プログラムの助成を受けて出版された。著者のマンヌー・バンダーリーは、インド亜大陸中部のマディヤ・プラデーシュ州の学者で社会活動家の家に生まれ、若き日に反英独立運動にも関わりながら、小学校教員となり執筆活動に入った。その後デリー大学で教鞭を執りながら創作を続け、退任後も作家活動を続けている。また夫君ラージェンドラ・ヤータヴも作家として知られる。

本書では、古い伝統を残しながらも、新興の中産層が台頭してくるインド社会の流れを背景に、女子校の校長を務める女性の離婚と再婚を契機とする心理の揺れ動き、そしてそれに伴う一人息子の葛藤が、女流作家らしい繊細な筆致で描き出されている。原著は1971年に出版されたが、インドの中産層の抱える現代的な問題が鮮やかに示されていたため、当時の同国の読書界に少なからぬ衝撃を与えたという。原文は微妙な心理描写が多く、それを日本語に移し替えるのに難しさがあったようだが、編集者の坂井正子氏と監訳者の橋本泰元氏そして橋本氏のもとでヒンディー語を学ぶ社会人の人々を中心とする共訳者のチームが細心の注意を払ったため、練り上げられた訳文となっている。(S. H.)



「にいがたレポート 不登校
自分への旅立ち」

子どもの権利条約 にいがたの会編

青英舎刊

99年5.31 A5判 214頁 ¥1,200

ISBN4-88862-760-6

国連「子どもの権利委員会」は、昨年6月、日本の教育制度が極度に競争的で、そのため子どもの心と身体の健康に悪影響を及ぼしており、過度のストレスから子どもを解放することの必要性和そのことによって不登校を防止することを指摘した。

学校から「安らぎ」と「楽しみ」と「やりがい」が奪われ、多くの子どもたちが常にストレスをためているような状況は、今後の社会のあり様を根本から揺るがす大問題であると言わざるを得ない。実際、いじめ・校内暴力・学級崩壊が深刻化し、不登校が日常化するような事態が現実となりつつある。このような中、子どもの権利条約・にいがたの会では、一昨年県内の不登校に関わる20余の団体や個人の協力のもとく新潟の不登校アンケート>を行い、県内各地173人からの回答を得た。

本書は、このアンケートの回答を不登校の子どもたちの権利保障に生かすとともに、すべての子どもたちの権利を守り、発展させるための世論につなげていくことを狙いに企画された。構成は以下の通り。
 <行けない 行かない—子どもたちの声>
 <まさか自分の子どもが—アンケートに寄せられた親の声>
 <不登校と向き合って—座談会>
 <ネットワークメッセージ—付資料>
 <なぜか思いが届かない—多感な季節>
 <第一歩を踏み出そう—ストレスからの解放>
 <173の声 173の姿—アンケート分析>
 <子どもの権利条約—かけがえのない人間として育つために> (G. W.)

「ピア・カウンセリングという
名の戦略」

安積遊歩+野上温子編
青英舎刊

99年5.20 B6判 248頁 ¥1,524

ISBN4-88233-045-8

ピアとは<仲間>のことで、ピア・カウンセリングとは、同じ背景を持つ者同志（この場合は障害者）が対等な立場で話を聞き合い、互いの自立生活をサポートし合うことを意味する。

実は、このピア・カウンセリングが障害者の世界で取り上げられるようになってから、すでに10年以上が経つ。そのパイオニアとも言えるのが著者等であり、リーダーの養成や講座の開発などを行いながらピア・カウンセリングの概念や手法等を全国の障害者に広めてきた。

本書では、著者等のピア・カウンセリングとの出会いから普及までのプロセス、および、（障害者の自立生活にとっての）この手法の有効性などについて、インタビューや座談会なども盛り込みつつ記されている。目次は以下の通り。

第1部：自己変革の道具としてのピア・カウンセリング。

第2部：ピア・カウンセリングのなりたち。

第3部：ピア・カウンセリングと私。

座談会：ピア・カウンセリングは私の宝。

インタビュー：私を変えたピア・カウンセリング（G.W.）

李 廷 江教授

（亜細亜大学国際関係学部）

堀川哲男記念賞を受賞

「堀川哲男記念賞」（孫中山記念会）は、天安門事件のとき中国人留学生の保護に全力をつくされた中国近代史研究者・故京都大学教授・堀川哲男氏の遺志を受けて設立された賞で、孫文研究に功績を認められた若手研究者を対象としている。

李廷江教授の研究関心は主に、清末民国初年における日本財界と中国との関係におかれてきている。今回の受賞対象となった業績論文も、「民国期における日本財界と中国—中国興業公司設立の考察」『国際関係紀要』第6巻第1号、「辛亥革命期における日本財界と中国—中央銀行設立案の形成過程」『国際関係紀要』第6巻第2号、および「民国初期における日本人顧問—袁世凱と法律顧問有賀長雄」『国際政治』第115号の3点と、氏の長年の業績が認められたもので、孫文研究に新しい領域を開拓したことが推薦理由としてあげられている。

また、いずれの論文もトヨタ財団助成による研究成果『日本財界と辛亥革命』（北京、中国社会科学出版会、1994年）が基盤となっている。

なお、当賞では三年毎に一人を選出し賞が授与され、今回は第三回となる。（K.T.）

理事会・評議員会開催

去る6月18日に第88回理事会と第24回評議員会が開催された。

88回理事会では平成10年度の決算が承認されたほか、平成11年度の市民社会プロジェクト助成、SEASREP、計画助成などの対象が決定された。また、評議員会には先に3月の理事会で決定された平成11年度の事業計画・予算が報告された。

特にSEASREPについては、マラッカでの選考委員会に出席した石井米雄理事より、東南アジアの参加各大学関係者の努力や、パートナーである国際交流基金アジアセンターの助力によって、プログラムが順調に発展している旨、報告があった。

なお、理事会・評議員会終了後、新旧の選考委員の方々や関係団体の方々などお招きし、懇談会が行なわれた。

編集後記

◆あまり知られることのないモンゴルの出版事情について、鯉淵先生には貴重なレポートをご寄稿いただきありがとうございました。

◆李廷江先生、堀川哲男記念賞の受賞おめでとうございます。今後ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

◆先ごろ財団で液晶プロジェクターを導入しました。パソコンの画面やビデオを投影でき、理事会でも好評でした。



トヨタ財団レポート No.88

このレポートを継続してご希望の方、また住所等の変更がございましたらお葉書にて財団までお知らせ下さい。

発行日 1999年7月9日
発行所 財団法人 トヨタ財団
発行人 黒川千万喜
編集人 久須美雅昭
印刷 真友工芸株式会社